

\*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

# 珈琲の思い出

鈴木 優子

# 45

「ねえ、この先に、こころへんで一番夜景が綺麗に見えるポイントがあるんだけど、ちよつと降りてみない?」

小高い丘に上る何度めかのカーブを曲がると、和樹は車を路肩に寄せてそつと駐めた。そして、車を降りると助手席側に回つてドアを開け優子に手をさしのべた。

優子は迷わずにその手を取り、車から降りた。

「うわあ、外は結構寒いのね!」

「うん、この辺はちよつと山の上だからね。ほら、もつと近くにおいでよ。」

そう言うと、和樹は左手で優子の肩を抱いて自分の方に引き寄せた。

「ありがとう。和樹さん、あつたかいわ。」

二人で互いの身体を密着させながら、暗い林を抜けていくと、

「わあ!綺麗!」

突然木立が開けて、眼下に港を臨む夜景が広がった。港の水面に街の灯りが映つてまるで宝石のようにキラキラと輝いている。

世界でも有数の夜景を誇るこのN町でも優子はこんなに美しい夜景は見たことがなかった。

「ね、綺麗でしょ?今日は特に寒くて空気も澄んでるし。僕はね、ここに特別な人を連れて来たかったんだ。」

思わず、感動して言葉に詰まった優子が「ありがとう、和樹さん」と言いかけると、その言葉が終わらないうちに、和樹が優子の腰を正面から引き寄せて、唇にキスをした。

「ん…。」

(続く)